



令和6年度 幼児教育研修（保育の質向上）

「対話する保育とは」 ～子どもの声や思いに耳を傾ける～

日時：令和6年5月7日（火）15：00～17：00

会場：足立区役所 庁舎ホール

講師：山梨大学 名誉教授 加藤 繁美 氏

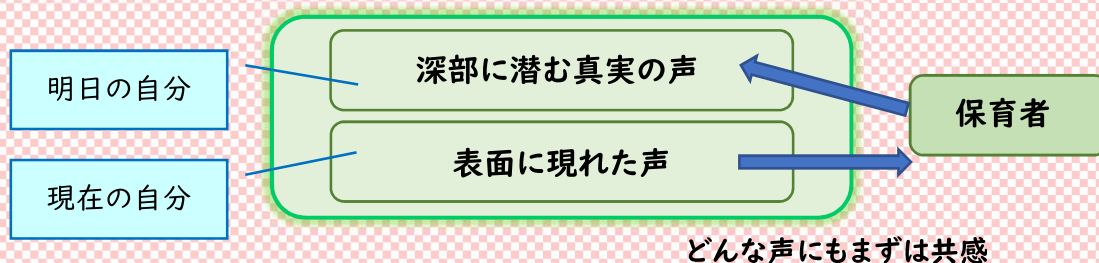
本研修では、子どもの声を聞きとる意味と子どもたちが自分の声を聞きとられる意味について学びました。



子どもたちが自分の声を聴きとられる心地良さ、
様々な声が聴こえてくる環境の心地よさを感じられる保育を目指そう
多様な声を響き合わせるおもしろさを感じよう

ポイント

子どもの声は、**二重性**をもつ



～Kくんの記録（5歳児）から考えてみよう～

0歳児から入園。
言葉を獲得していても話さない。
できないやらないが当たり前。



年長児なのに
このままでいいの？

保育者の対応

状況を問題と捉え、Kくんへの関わり方を変える

保育者の気付き

なぜKくんは5年間園に通うことができたのだろうか。

Kくんは、笑いたい！しゃべりたい！元気に遊びたい！と心のどこかで思っているのではないか

夏

縁日ごっこに参加し、
踊りを踊れた



参加できた
だけで十分

秋



競技の戸板登りで、
Kくんはチラッと高い戸板に
視線を送った。

Kくんは高い戸板を登り切った。



あっ！Kくんやりたいのかもしれない。

「Kくん、高いのやってみる？」

共感



Kくんは、低い戸板で十分だと
決めつけてしまっていたわ

そったくどうじ

啐啄同時

学ぼうとする者と、教え導く者の息が合って、相通じること。

子どもの声を聴くことは、**子どもの願い**に耳を傾けること

互いが響同＝協同し合った時、新しい何かが誕生する



保育実践を支える三つの視点

子どもは意味を
つくる主人公

子どもの心は
二重の構造をもっている

子どもは自分で
自分を変えていく



～Iくんの記録(5歳児)から考えてみよう～

友達が劇に取り組む姿をじっとみていた。積み木を持ってきて舞台の中央に置き、バンバンを押し始めた。

友達に行動を止められるが、Iくんは繰り返し同じ行動をとる。

「〇〇～ブ!!」と呟いた。 **表面に現れた声**

共感

「Iくん!面白いこと考えるね～。
ユーチューブかぁ。気が付かなかったよ。」



分析



Iくんの願いに気が付いたことで、保育者の自己満足で終わらないこと。
本当のIくんの声は、友達に向けられている。
「あの～僕はユーチューブのスイッチ係として劇に参加したいんですけど…」と。 **深部に潜む真実の声**

劇について、皆で話あってもらおう。
集団として対話する力を育てたい。



子どもが声を聴きとられる意味

Iくんはどこで登場
してもらう?

居場所の発見(安心)

発達の原動力(もう一人の自分)

★ **関係づくりの起点(参画の起点)**



分析



子どもは、自分の声を聴き取られる喜びを知った子どもだけが相手の声を聴きとる主体に発達する。



研修生の報告書より

子どもは自分の考えをもち伝える力があること、相手(仲間)の言葉を聴きながら相手のことを理解しようとする力があることに驚いた。「自分の声を受け止めてもらった子どもは、大人になった時、自分の声も他人の声も大事にする対話の主人公になる」という言葉を大切に保育をしていきたいと思った。

表面に現れた声だけでなく、深部に潜む本当の声に気付いているのだろうか自分をみつめ直すきっかけになった。子どもの言ひなりになることでも、甘やかすことでもなく、一人の市民として子どもの声を聴き取ってあげることが大事だと学んだ。